

香川県知事等南米移住各国訪問

1. 金子知事の訪問

金子知事は南米移住に強い関心を持ち1953年(昭和28年)に香川県移住協会を設立し、自ら会長に就任するとともに、1954年(昭和29年)副会長の今雪眞一にブラジル・パラグアイ・ウルグアイ・アルゼンチンの4ヶ国の移住地を視察せしめ、1956年(昭和31年)自らも南米に出かけ、前年にブラジル香川県人会が設立されたので、その挨拶と南米5ヶ国を約半年をかけて視察に出かけた。これが第1回でその後県庁内に移住相談所、県農業拓殖基金を設立するなど非常に熱心であった。金子知事は「今100人の青年が南米へ行くのなら私も知事を止めて南米に行く」と述べていたほどであった。

1963年(昭和38年)金子知事が南米視察をしたのが第2回目で、1972年(昭和47年)に海外技術研修員の受け入れを始め、特に南米移住者の子弟を中心に受け入れた。さらに1973年(昭和48年)にブラジル香川県人移住60周年記念祭典に出席し、ブラジル在住の香川県人の活躍状況を視察した。そして、ブラジル香川県人会が創刊した「香川情報」に「創刊によせて」を寄稿している。

創刊によせて 香川県知事 金子 正則

ブラジル香川県人会の皆さま、まず以って、皆様のご健勝と県人会報としての「香川情報」の発刊を心からお祝い申し上げます。

顧みるに、私が知事として初めてブラジルを訪問してから早々も17年、更に第2回目の訪問からも7年余りになりますが、あの時の盛大な歓迎、発展をしつつある郷土のことを説明申しあげた時の皆さまの喜びに満ちあふれたお顔、今もなお彷彿として眼前に浮かび思い出深いものを感じます。

私は、幸せにも郷土の知事に六たび選ばれ、県政を担当すること22年余、時代の進運と香川の特性に鑑み、わが郷土香川の進むべき基本的目標を「都市と農村の良さを兼ねそなえた明るく、住みよい暮らしよい田園都市的地域社会としての香川の建設」と「活力と創造力に満ち人間性豊かな人材の育成」の二つに置き、県民とともに努力を重ねて参りました。その間、昔から水不足に悩むわが香川の短所を是正すべく阿讃山脈にトンネル8軒をぬき吉野川の水を導水する香川用水事業が大きく進み、昭和49年春には高松まで通水することとなり、また、本土と四国を結ぶ世界の長大橋、瀬戸大橋もいよいよ昭和48年秋には本格的に工事が開始される運びとなるなど、県政百年の大計とも言うべき大事業が着々と進められ、今やわが香川の前途は洋々たるものがあります。

なお、こうした情勢の中でブラジルからの若い5名の研修員は全員極めて元気で優れた技術を身につけるべく日夜研鑽に努めるとともに、日本の味、香川の味にも興味を覚えつつあります。

ここに郷土香川の近況を二、三ご報告申し上げますとともに、皆様の益々のご健勝とご多幸を心から祈り、「香川情報」の活発な展開を通じ香川県が融和団結して発展せられんことを切に願い、創刊に寄せる言葉といたします。

金子知事の6期24年間は南米移住が最も積極的で、活発な時期であった。



ブラジル県人会発行の香川情報 創刊号

三惚哲学を説く

『南米を旅して』 金子・今雪共著より抜粋

サンパウロ市その他に住む多くの県出身の人々の歓迎は、実に涙ぐましく、嬉しく、殊に7月8日日曜日に開催されたサンパウロ市における歓迎会は感激的なものであった。

遠くサンパウロ州、パラマ州の奥地から2日以上もかかり、郷土の香りがかがんとしてサンパウロに出かけて来た人々、嬉しくなつかしく郷土から来た知事を取り巻いて郷土の事情を聞きむさぼる人々の顔を見ると、私もまた胸迫るものを覚えた。数十年苦闘を重ね、努力に努力を続けて一応今日の地位を確保し、今やこのブラジルを安住の地と定めて進まんとするブラジル第一世の人々の顔を拝するとき、唯頭の下がるのみである。

乞われるまゝに知事としての挨拶をした。余りかたぐるしいことも席場の空気から避けるべきだと感じたので、平素最も平凡だが然し真髓をついた処世哲学とも考える「三惚哲学」がブラジル移民の方々にはぴったり来るのではないかと思ひ挨拶の重点とした。

それはこうなのである…

「今回渡米し、つづいて渡伯するにあたり、この地で努力せられている郷土の皆さんに代り私は琴平さんに参詣した。そして皆さん及び家族の御健勝と御発展を祈りつつおみくじをひいたところ、三惚と出た。三惚とは何かとその中のおみくじを調べてみると、

『土地に惚れ、女房に惚れてその上に仕事に惚れる人は仕合せ』と書いてある。これを移民として苦闘せられて来た皆さんへの琴平さんからののおみくじと思ひ御披露致します。

お互いの仕合せのために女房に惚れ、仕事に惚れることの重要性については体験者の皆さんに多く語る必要はないが、土地に惚れという点について一言したい。広い広いあり余る程の土地を耕作してきた皆さんがその耕作の土地を愛する必要があることは勿論であり、臍の緒を切った土地即ち皆さんの郷土を愛しこれに惚れることも人情の常であるが、私の更に申し上げたいことは、このブラジルに住む皆さんはどうぞこのブラジルに惚れて下さい。現在皆さんが住んでいる市、町に惚れて下さい。愛して下さい。

このことが即ち皆さんのあこがれの郷土香川を愛し、祖国日本を愛し、これに惚れることになり、更に又皆さんの仕合せを招来するのだと思う。土地に惚れの意義は極めて深く重要である」と冗談交えての挨拶をつづけると、出席者の県人の顔は笑いにほころびながら、目に何か光るものを感じた。

自分でユーモア多い挨拶をしながら、冗談も程がある、琴平さんのおみくじなど嘘言ったりしてと思っただけでなく、郷土と女房に離れ、知事としての重職を空しくすること数ヵ月、もう仕事がしたいのみならずホームシックにかかって少しく頭が変になっているのではないかと疑われそうだがと、多少冷汗を感じたのであるが、挨拶終るや否や、私の席に押し寄せ、口々に云う。「数十年苦闘を続けて今日に来た移民の我々に、現在この位最も解

り易く、面白く、しかも真髓をついた私どものモットー(標語)は聞いたことがない。もう一度言って下さい。書いて下さい」と。

土地に惚れ、女房に惚れてその上に
仕事に惚れる人は仕合せ

神戸の県人塩田富造氏御寄贈の琴平宮の御符も有難いことだが、耳からいただいたこのおふだの三惚の御土産は又よい御土産だと大喜び。県人会を兼ねたが如きこの歓迎会の雰囲気も亦極めて明るい。

夕やみせまる頃、県出身者のために見せたい、聞かせたいと思って持参して来た香川県の観光、産業、教育、民俗等を写した天然色のスライドを幻燈でお観せすると共に、香川県民歌及び滝宮小学校の生徒のハーモニカ合奏のレコードをお聞かせした。一時間以上かたずをのんで見、聞き、中には涙ぐみ、手を合せて聞き観る人もあり、余りにも美しい郷土を思出させ、慰問にならないようにも感じた位であったので、幻燈の終るに当り、このスライド、レコードは第一世の皆さんよりも実は第二世第三世の方に聞かせたり、見せたりするのが主眼である。こんな美しいよい郷土をあとにして、第一世は渡伯し努力しつづけたのだ。この第一世の気持を推察して欲しい。尚又こんな美しいところを第一世の方は勿論二世三世の方々のためにも私どもは保存しつづけて、常にお出で下さることを心から歓迎しているのだという意味を言わず語らずの中に表わしているのであると御諒承下さいと、附言せざるを得なくなってしまった。

「誰か故郷を思わざる」と常に称しつづけているが、今日程、その切実さを感じた日はない。

県出身の人々は勿論、日本からはるばるブラジルに移民せられた人々の御健勝と御発展を祈るや切なるものがある。